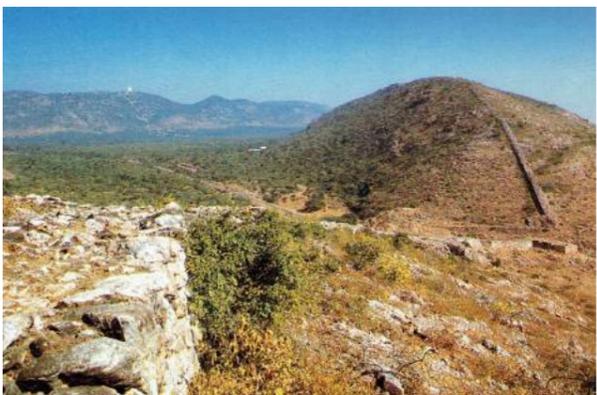


バンビサーラ王との対話

沙門となったシッダールタは既に王子のきざしびやかな装身具も衣服も身につけていません。装身具はチャンドカへ渡し、衣服は偶然にであった獵師と交換しました。今、着ているのは獵師が来ていたボロボロの衣服でした。これを袈裟としました。サンスクリット語で「カシヤーヤ」といふボロ布のようなものを意味します。世俗の華美な衣を捨て、その身ただひとつになるという決意なのでしょう。現代では「袈裟」といって、僧侶が首や肩から下げる、きざしびやかな金糸刺繍や高価な織物で作ったものが多いですが、本来はこうからきている名前です。さらにシッダールタは長かった黒髪も剃り落としました。沙門シッダールタがまず向かったのは

「南」でした。目的地は以前(善仁寺寺報第9号)に説明した最大の強国、マガダ国の首都ラーシヤガハ(王舎城)です。当時のインドで最大の都市でした。都市国家として成長しつつあるインドにおいて、新しい思想家も多く生まれ、彼らもまた、このラーシヤガハに集まったのでした。そこへ行き出家したシッダールタはまず師を求めたのでした。しばらく町に托鉢をしながら師を求めていました。その姿を宮殿の高楼からじっと見つめていた者がいました。それはマガダ国の王、ビンビサーラでありました。シッダールタ沙門の托鉢の様子がこの大国の王の目を引くほどに、威厳に満ち、素晴らしい姿であったのです。王は使いの者に「あの者の在処をつきとめよ」と命じました。使者はその沙門がパンダヴァ(槃荼婆)という名の山の洞窟に住んでいることを突き止めて、王に報告しました。「かの沙門は虎のごとく、牛のごとく、



↑王舎城南門址…かつての賑わいはなく、山々に囲まれて静かに佇む。数世紀後に玄奘三蔵(三蔵法師)もここを訪れる。

獅子のごとくに坐して見ます。」これを聞いたビンビサーラ王はじめてもたつてもいられず、壮麗な車に乗って沙門に会いに行ったのでした。シッダールタ沙門を前に王は言いました。「若き沙門よ、由緒ただしきクシヤトリアの沙門よ、そなたの望む俸禄を与えよう。像の群れを先頭とする精銳の軍隊に参加するのだ(委ねよう)」「それは仕官と還俗(沙門をやめること)の勧めであったのでした。(つづく)

編集後記

平成22年の8月に創刊してはや4年半。ようやく20号まで辿りつきました。過去の号で中途に終わっていた特集なども、そのままになっており、この本山についても創刊号でこの本山は京都の東本願寺です。と書いたきりでした。今回の号でも再建の歩みなどまだ書ききれない物語がありますが、また改めてお伝えします。さて、まだまだ寒いですが、日差しの中にもう春の訪れを感じるようになってきました。境内の梅も、もうすぐ咲きます。御参詣の折には、ご覧ください。(しょうまん)



合掌 (しょうまん)

ぜん にん じ じ ほう 善 仁 寺 寺 報

THE ZENNINJI NEWS

2015年2月10日発行

Vol.20

発行者 青山 満 発行所 東京都文京区小石川4丁目13番19号 TEL 03(3811)4803 FAX 03(3811)3295 E-mail kbkpm386@ybb.ne.jp

今号は祝二十号にふさわしい特集として、また、「本山はごんご」という質問多数あることから、ここで改めてわたしたち真宗大谷派の本山である東本願寺についてご紹介いたします。まず、お名前ですが、正式名称はタイトルの大字のごとく、「真宗本願」といいます。通称を東本願寺といっています。 造建築物なのです。ちなみに善仁寺本堂は四間幅ですので、約1.3倍です。 現在の堂宇は明治28年(1895)年に落成したものです。そして、むかつて左側にもおおきな堂宇が建っています。 こちらは阿弥陀堂と呼び、本尊の阿弥陀如来が安置されており、本堂となります。御影堂よりも少し小さ

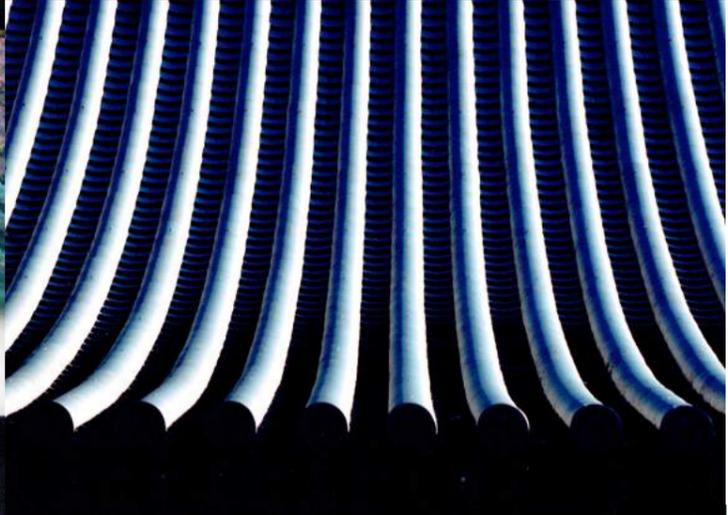
真宗本廟

場所 京都市下京区(詳細次項)に位置し、約93,140㎡(約28,200坪)の広さがあります。 東本願寺伽藍(か藍)の中心建築はこの御影堂と阿弥陀堂といえるでしょう。 その他にも御影堂門、阿弥陀堂門、鐘楼なども明治年間に建造されたもので、威容と佇まいはすばらしい寺院建築様式で造られています。 といつても南北52メートル(二十九間)、東西47メートル(二十六間)もあります。 東本願寺伽藍(か藍)の中心建築はこの御影堂と阿弥陀堂といえるでしょう。 その他にも御影堂門、阿弥陀堂門、鐘楼なども明治年間に建造されたもので、威容と佇まいはすばらしい寺院建築様式で造られています。





杉並写遊会
「善仁寺」
～晩秋の訪ない～
昨年(平成26年)の十一月
二十七日に写真サークルの皆様が
撮影にいらつしゃいました。
後日、右表題のフォトブックと
お礼のお手紙をいただきました。
しまっておくだけではもったいな
い素敵な写真ばかりで、皆様にこ
ろごころと拝見いただきたく、一部ですが、
掲載させていただきます。



では、東本願寺の歴史を急ぎ足でみてまいりましょう。
親鸞聖人が弘長2(1262)年入滅され、大谷の地の埋葬されました。墓は「南無阿弥陀仏」と書かれた簡素なものであったようです。
後に墓地よりほど近いところに聖人の末娘である覚信尼が住んでおり、その地に廟堂が建てられ墓塔も移されました。これを「大谷廟堂」と称し、建築様式は六角の御堂で、その中心には墓塔が安置されました。
その後、廟堂に「専修寺」と額が掲げられましたが、覚如上人(本願寺三世)のとき「本願寺」と称するようになりました。
廟堂から寺院への表明のなかで、その当時、廟堂には親鸞聖人の木像が安置されていましたが、さらに阿弥陀如来像を安置することとなりました。
さらに時代は下り、存如上人(本願寺第七世)は二つの建物に親鸞聖人像(御影像)と阿弥陀仏像(御本尊)を安置する形態から、御影堂と阿弥陀の両堂を別箇にすることにしました。このときの規模は御影堂が五間

四面、阿弥陀堂が三間四面というものでした。
しかし、蓮如上人(本願寺第八世)の頃には比叡山勢力による本願寺の破却(1465年)があり、本願寺の拠点は京都から吉崎(福井県)へ、さらに京都山科へ、石山(大阪市)へと転々としていきます。
比叡山勢力だけではなく、織田信長などの戦国武将や法華宗勢力との戦いを通して移していかにざるをえなかったのでしょうか。
石山本願寺は城郭のような構えであったようです。本願寺勢力(当時「向宗門徒」と呼称)は信長と和睦し、大阪を退去します。
その後、豊臣秀吉により、大阪天満を経て京都堀川に移されます。(1581年)これが現在の西本願寺の地です。翌年には諸堂が完成しています。
顕如上人(本願寺第十二世)の急死によって長男の教如上人が本願寺を継承しましたが、三男の准如上人への顕如上人の「譲状」が如春尼(顕如内室)によって示され、秀吉は教如上人を隠退させ、准如上人への本願

寺継承を認めました。
秀吉の死後、徳川家康から教如上人は寺地の寄進を京都東六条(現烏丸七条)に受け、ここに東本願寺が成立します。(1602年)同時に本願寺は東西に分派することとなりました。このことについては、家康の本願寺勢力の弱体化が目的など、諸説あるようです。
しかし、京都の大火によって四度(1788年、1823年、1858年、1864年)も罹災し、伽藍はその度に焼失、全国の門徒の尽力により、再建が繰り返され、現在の東本願寺の姿となりました。
長い歴史の中で相続されてきた東本願寺に是非とも直接、足を運び参詣なさってください。

Memo
東本願寺ホームページ
<http://www.higashihonganji.or.jp>
所在地
京都市下京区烏丸通七条上ル
(京都駅より徒歩7分)
代表TEL
075-371-9181



Topics
善仁寺からのお知らせ
車イス用スロープが完成しました
前号よりご案内しておりました、車イス用スロープ工事が完了しました。
工事中は墓石養生などによりお参りにご迷惑をおかけいたしました。またご協力くださいました皆様方にはこの場をかりまして厚く御礼申し上げます。